

3. ハンセン病関係

- ① 国立ハンセン病資料館の管理運営受託
- ② ローマ教皇庁との共同国際シンポジウム

日本財団 常務理事
田南 立也(たなみ たつや)

① 国立ハンセン病資料館の管理運営受託

(1) 背景

日本財団は、過去50年以上世界のハンセン病の問題に多角的に取り組み、ハンセン病の制圧に加えて、患者・回復者およびその家族の人権を護り、名誉を回復することに対して積極的に支援をしてきた。

ハンセン病についての誤った認識・偏見がいまだに消滅していない状況にある。日本では20年前に「らい予防法」が廃止されるまで隔離政策が続き、ハンセン病患者は家族からはなれ療養所で生活することを余儀なくさせられた。

ハンセン病に対する無知と病気に対する偏見を解消し、患者・回復者の名誉と尊厳を回復するためにハンセン病患者・回復者の方々の生き様や差別の歴史とその意味を正しく社会に伝えることが重要である。

(2) 概要

4月1日より日本財団が国立ハンセン病資料館の管理運営を厚生労働省から受託

清瀬の同資料館は、1993年に開館し、2007年に建築リニューアルを経て再開館。草津の重監房資料館は2014年開館

ハンセン病に対する正しい知識の普及啓発により、偏見・差別の解消と患者・回復者の名誉回復をはかることを目的

そのための教育啓発活動、展示業務、資料の収集保存、情報発信の拠点、交流の拠点

国立ハンセン病資料館 外観



出展：東京にしがわ大学

内 観



出展：(左)丹青社 (右)タウン通信プラス



重監房資料館 外観



出展：草津よいとこブログ

重監房資料館 内観



出展：草津よいとこブログ

(3) 国立ハンセン病資料館の管理運営委託のポイント

日本財団の培った世界的な幅広いネットワークを活用することにより、世界のハンセン病資料館を目指す。

情報発信業務を充実させ、入館者数の増加に取り組む。

(現在の年間入館者数は、30,000人。重監房資料館は8,000人)

歴史的資料の記録・保存への日本財団の取り組みと資料館業務との連携を図る。

②ローマ教皇庁との共同国際シンポジウム

(1)背景

2013年、フランシスコ教皇様のお言葉の中で教皇庁の「出世主義」を「ハンセン病」にたとえたことに対しWHOハンセン病制圧大使、ハンセン病人権啓発大使である笹川陽平から抗議の書簡送付。

昨年6月ブラジルの回復者が日本財団の支援によりローマで法王に謁見、その際に笹川陽平からの書状で教皇庁と日本財団共催による国際会議の開催を具申。

本年1月教皇庁保健従事者評議会から開催受諾の返事。6月の開催を決定。

今年は「いつくしみの特別聖年」で、6月12日にはサンピエトロ広場で「病者と障がい者のための公開ミサ」が教皇によって行われる。会議参加者はこのミサにも出席予定。

(2)国際シンポジウム概要

時期： 2016年6月9日～10日

場所： バチカン市国ローマ教皇庁会議場

テーマ：「ハンセン病患者・回復者の尊厳の尊重とホリスティック・ケア」

主催： ローマ教皇庁保健従事者評議会・日本財団

協力： 笹川記念保健協力財団、善きサマリア人財団、
ラウル・フォレロ財団、マルタの騎士団

主たる出席者：宗教者、国際機関代表、ハンセン病NGO、ハンセン病
回復者など、出席者総数200名を予定。
(日本からの回復者も含む約10カ国の回復者代表30名
が結集)

※ローマ教皇庁と日本の組織がハンセン病についての会合を共催で行うのは
初めて

(3)目的

ローマ教皇庁の名のもとに日本財団その他の協力団体とともに世界にメッセージを発信し、社会啓発をはかる

回復者の社会復帰のため保健従事者、宗教者の役割について意見交換

ハンセン病の現状(医療面、社会面)を検証

疾病の減少、病者とその家族への支援

〈参考〉

第266代ローマ教皇フランシスコ



出展: e Story Post

〈参考〉

バチカン市国 サンピエトロ広場



出展: Good Looking Life-nissey's Blog